

## 【血の呪い】

桶狭間の合戦後から、一年後、信長は反乱した織田信清の支城小口城（中島豊後守）をせめていた。

岩室長門守が小姓衆を率いて出撃するのを、信長は見送る。岩室は馬を止め、振り返り信長に語りかける。

「信長様が覇業を成し遂げるために、足りぬものがひとつあります。それは恐怖です。敵に正しく慄き、その上で敵に立ち向かい、葬ってこそ真の英傑です。どうか、恐怖を知り、真の英傑となってください」

なぜか、そんなことを言って、岩室長門守は出陣する。

↓

恐怖か、と独語する。

信長は回想する。己が最初に恐れを覚えたのは、いつだったろうか。

それは信長の最初の記憶だ。

まだ物心つく前の頃、母に「この子は鬼じゃ」と叫ばれたのだ。理由はわからない。

だが、あの時、今の信長が久しく忘れてしまった感覚に襲われたのを覚えている。きっとあれが恐怖だったのだろう。だが、その恐怖は、信長の心身には宿らなかった。

なぜか、信長を見る母の顔が怯えていたからだ。まるで、信長に芽生え始めた恐怖を吸い尽くすように、母の顔が青ざめていく。

きっと、あれ以来、信長は呪いをかけられたのだ。母の鬼という言葉によって、恐怖を感じない心身の持ち主になってしまった。

そんな、己に恐怖を思い出せと、岩室は言う。

信長は失笑した。

そんなものは必要ない。

そう思った直後に、伝令が来る。

伝令の兵は、岩室長門守の戦死を告げる。腹心の死に信長は動揺する。

↓

信長は久しく恐怖を感じたことはない。だが、どういうものかは何となくわかる。己を畏怖する部下という鏡に映すことで、幾度も恐怖を観察したことはある。部下たちは鞭を振り上げれば震え、過酷な命令を下せば顔を青ざめさせる。あれが、きっと恐怖だろう。

誰ならば、己を恐怖させることができるだろうか。信長は考える。

思い浮かんだのは、妹の市だった。

完璧な美しさを持つ女性に育っている。歴戦の武将たちも市を見ると、慄くかのように緊張している。

あるいは、市ならば、己を恐怖させることができるのではないか。

信長は市を誰に嫁がせるかを考える。白羽の矢がたったのが、浅井長政。年少にして何倍もの六角軍を打ち破ったという。面白い、と信長は思う。市に豪傑の浅井の血が入れば、あるいは己を恐怖せしめることができるかもしれない。

↓

信長は上洛直前に、結婚した市と浅井長政と対面を果たす。

そこで、信長は失望する。浅井長政は井伊直盛と同じだ。力はあるが、野心はない。何より、市の顔が母の顔になっている。美しさは磨かれているが、かつて家臣たちを畏怖させたものはどこかに消えていた。

つまらんな、と思う。何もかもが、信長の見込み違いだ。

どこかに信長は、浅井家を侮る気持ちが芽生える。

それがきっかけで朝倉攻めを決意させる。もう、浅井に気を使う必要はない。

↓

朝倉攻めで浅井の裏切りを聞く。聞けば、浅井家一丸となって、反織田の旗をあげて、退路を塞いだという。

信長は驚く。もし、浅井が反織田となっても、家中が分裂すると確信していた。そして、信長のもとに知らせがくるはずだ、と。だが、家中はひとつにまとまり、信長を葬らんとしている。そこまでの人物が浅井にいただけるか、といぶかしむ。

信長は木下藤吉郎に殿を命じる。奇妙なことに秀吉は満面に笑みを浮かべて、命令を拝受した。藤吉郎は奇妙な男だ。他の部下なら、信長の命令に青ざめただろう。だが、奴はどんな過酷な命令でも喜び嬉々として拝命する。

↓

(秀吉の活躍で信長は危機を脱し、姉川の合戦へと赴く)

浅井朝倉連合軍を目の前にして、信長は家康を呼ぶ。そして、家康に数で勝る朝倉を相手にするように言う。家康は無表情で受ける。

こやつも不思議な男だと思う。朝倉の大軍を相手にするのだ。絶対に他の武将なら恐怖する。しかし、そんな様子をおくびにも見せない。

ふと、秀吉のことを思い浮かべる。

家康と秀吉、このふたりだけは信長に対して決して恐怖しない。不思議な男たちだ。

↓

姉川の戦いで、信長は苦戦する。一時本陣近くまで敵が殺到する。

果たして、己は畏怖するだろうか。しかし、恐怖らしきものは感じなかった。

やがて浅井朝倉軍は瓦解する。

↓

浅井朝倉を滅ぼし、信長は意外なことを聞く。浅井家中一丸となり信長に対抗したのは、市の一言がきっかけだという。市の美しさに畏怖していた諸将が、さもありんと頷く。

「信長様、市様は恐ろしい方でございます。戦国の定法ならば、再びどこかの大家に嫁がせるべきですが、そうすればその大家がまた浅井のようにこちらに鋒を向けてくるやもしれません」

柴田勝家が進言する。

「では、市を殺すのか」

柴田勝家の顔が歪んだ。

「いえ、そうではなく。仏門に入れるのです」

市の美しさに畏怖していた諸将が皆、頷く。

「そうです。市様だけではありませぬ。その娘三人も仏門に入れましょう」

信長は部下たちの言葉に頷く。どちらにせよ、己に逆らったのだ。何らかの罰は必要だ。仏門に入れるぐらいがちょうどいいだろう。

↓

市が娘と一緒に浅井の霊を弔っているところを見る信長。

市の姿はやはり以前のままだ。もう、他者を畏怖させる美しさはどこにもない。市を仏門に入れると決断したことを、少し後悔する。もう恐れることは何もない。ならば、外交の手駒をひとつ失ったことになる。

ふと、娘ふたりが気づきこちらを見た。その瞳を見た瞬間に、なぜか、信長の肌が粟立つ。

なんだ、これは、と肌を撫でた。

まさか、これが――

そう思った瞬間に、粟は消える。

もしかして、先ほど感じたのは恐怖だったのだろうか。

まさか、己は市の娘ふたりに恐怖を覚えたのか。

なぜか、信長の口は微笑を象る。

ありえない。所詮、ふたり（茶々と初）は女だ。信長をおびやかすことなどない。

あるとすれば、ふたりがどこか有力な大名か家臣に嫁いだ時だ。が、あの浅井長政でさえあななのだ。己を畏怖する家臣たちもしかりだ。

が、その時、ふいにふたりの男の顔が浮かぶ。

木下藤吉郎と徳川家康。

己に恐怖せぬふたりの血が、あの娘ふたりと交われれば。

ぞくりとまた肌が粟立った。正体を確かめるもなく、肌の粟は消える。

面白いと、信長は思った。あるいは、あの娘を生かし、誰かと嫁がせれば、己は恐怖というものをこの手にできるかもしれない。

信長は市とその娘を仏門に送るという命令を解除することを決意して、終わり。

### 【年表】

1560 桶狭間の戦い

1561 年 6 月 反乱した犬山城主織田信清の部下の小口城攻めのさいに岩室が討ち死に

1563 小牧山城へ移転

1564 市と長政の婚姻 5 月織田信清の犬山城落城

1567 美濃を占領

1568 信長上洛

7/6 小谷 7/7 佐和山滞在

9/7 岐阜を出発し上洛開始

1570 朝倉攻めで浅井が裏切る

姉川の戦い

1573 浅井朝倉滅亡